

「脳疾患患者の育児行動における技能と環境についての考察および患者にかかわる作業療法展開についての多面的影響」 研究経過報告



内田 智子 氏

研究の進捗状況と今後の予定

内田 智子

(神戸大学大学院, 作業療法士)

第17回作業療法ジャーナル研究助成をいただき、研究を進めております。

研究テーマは「脳疾患患者の育児行動における技能と環境についての考察および患者にかかわる作業療法展開についての多面的影響」です。若年者が脳疾患となり、障害が残存した場合、家事や育児等の複雑な日常生活の課題に直面することになります。これらの課題を明確にし、作業療法プログラムの一助となることを目的としています。

共同研究者の土佐リハビリテーションカレッジ 片岡聡子先生と、発症時9歳までの児を育児中であった脳疾患患者で研究時発症10年以内の方を対象に10名の半構造化面接を行い、共通して述べられた困りごとやその解決方法について分析しました。育児における困りごとについては、児の年齢により内容が異なっており、乳幼児では第一におむつ替えが挙がり、特に便

の際の困難さが、第二に抱っこした状態での床から立ち上がり、歩行での困難さが語られました。入浴については怖さのため未実施の事例も数例みられました。幼児、就学時では、髪を結ってあげられない、学業の援助で、連絡帳へのサインや、保育園・習い事の送迎で困難があり、習い事については送迎困難のため、児にやめてもらった事例もありました。また、高次脳機能障害のあるケースでは、自身では困難さを感じていなかったり、実施困難の自覚がなかったが、周囲が気づきフォローされている例もありました。この結果については2023 International Neuropsychological Society Taiwan Meetingにて報告しました。

今後は、育児が必要な患者に対する作業療法経験のあるOTへの半構造化面接を行い、脳疾患による障害が育児行動に与える影響と作業療法のかかわりについて考察する計画です。